

イグル語でアラビヤ文字を用ゐて書き、*m(ä)ngü t(ä)ngri küc(i)nda* (長生天氣力裏) と記してある。かく古くから蒙古で用ゐた形式を支那でも波斯でも其の後嗣者等が引き續き使用してゐたもので、所謂漢語の詔勅なるものの初めに見ゆる所も、たゞその直譯に過ぎず、それに續く文章も、同様に蒙文の直譯に過ぎない。それだからこれを以て初めから漢文で書いたものと解釋してはならぬ。特にその意を汲んで漢文で書いたものには、此等の「長生天氣力裏。大福蔭護助裏」の文句は、單に「上天眷命」と書いて居るに過ぎないのが常である。

以上述べた所に依つて、元朝が支那の地を治めながらも、施政上の方針として、終始一貫して蒙古の文字言語を支持しようとし、漢語漢文を閑却した有様を知るに足りるであらう。此の態度は同じ朝廷が政治的にも社會的にも、漢人・南人等に對して取つた態度と能く合致するものであつて、すべて同一の根本觀念から發生した現象に外ならぬと思はれる。趙翼はよく知らるゝ通り、其の二十二史劄記の中に、「元制百官皆蒙古人爲之長」の一篇を收め、元史百官志序に、中書省・樞密院・御史臺以下、百官の長は蒙古人を以て之に任じ、漢人南人は之に貳すると見ゆる原則について、僅少の例外を除いては事實として現はれて居ることを論證し、「有元一代。中外百官偏重國姓之制也」と斷じた。尤もかゝる見方は必ずしも趙翼に始まるのではなく、葉子奇の如きも既に之を論じて、

元朝天下長官皆其國人。是用至於風紀之司。又杜絕不用漢人南人。宥密之機。又絕不預聞矣。其海宇雖在混一

之天。而肝膽實在胡越之間。不過視官爵爲己私物。其視古聖立賢無方之道。果何如哉。

草木子卷四、  
雜俎篇

といひ、又